

東山道支道(古峠越)

東山道は、都と東山道諸国の国府を結び、律令の幹線道路(官道)であった。

信濃国における経路は、美濃から信濃坂を越えて天竜川沿い上がり、かかし覚志駅(塩尻市)を経て、錦織駅(旧四賀村)で本道は東に転じ、保福寺峠を越えて旧青木村へ入り、亘理駅、清水駅、碓井峠を越えて上野国(群馬県)へと至っていた。

東山道支道は、錦織駅から分かれ、立峠を越えて麻績駅へ、そして亘理駅、多子駅、沼辺駅を経て越の国へと向かっていた。

麻績駅を経て善光寺平に至る初期東山道支道の峠越えは、猿ヶ馬場峠(黒坂周平説)、一本松峠(一志茂樹説)、古峠の三説があつて、地元誌(麻績村誌、坂井村誌、戸倉町誌、更埴市史)は、一番標高が低く、平地まで最短距離の峠である古峠越えを推定している。

東山道支道は、都と国府間の情報伝達、労役、納税などに利用された。奈良時代から平安時代の初期は、越後の蝦夷対策遂行のため、ぬたりのき淳足柵やいわねのき磐舟柵へ、兵や軍事物資を運ぶ軍用道路としての役割を担ったと推定される主要な道路であった。

平成四年、戸倉町文化財調査委員会(戸倉町教育委員会、戸倉史談会)は、長野県文化財保護協会の要請により、古峠経路の調査を行った。そして、坂井村教育委員会の調査報告も付け加えられた調査報告書が、同協会に提出されている。

古峠から御麓地区に至る古道の復元は、同調査委員会に報告書に基き復元された。なお、途中の馬頭観音より下は、現代の舗装道路との関係で、一部脇道を利用した。また、古峠直下は、急峻であり、崩落の痕跡もあったため、経路を特定するのは困難であったが、斜面を東側に下る経路の痕跡が認められたので、地形の状況などを総合的に判断し、経路であると推定して復元された。

平成二十六年六月

戸倉史談会

冠着山の自然と文化遺産を保存する会

冠着山(姨捨山)の自然・歴史・文化

(冠着山の自然と文化遺産を保存する会)

自然

(1) 位置・その他(頂上に三等三角点)

・標高 1252.2m ・緯度(北緯) 36° 28' 07" ・経度(東経) 138° 06' 24"

・山頂で日の出・入り観測

日の出—— 最も早い日の時刻 6/1, 4:30 最も遅い日の時刻 1/1, 6:59

日の入り—— 最も早い日の時刻 12/1, 16:32 最も遅い日の時刻 7/1, 19:09

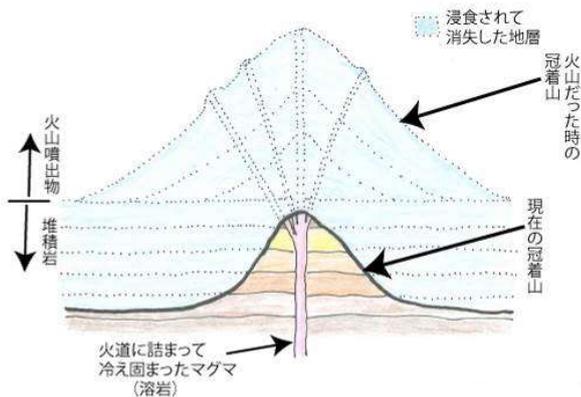
・信州の百名山—— 98番目の標高(1番目は穂高岳 3190m、100番目は太郎山(上田市)1164m)

・校歌に歌われる山—— 千曲市内 13の小・中学校の内 9校の校歌でうたわれている(4中学は全て)。

(2) 動植物こぼれ話

- ・剛力男松—— 冠着山の東側登山道(山頂直下 200m付近)に両手を広げて立ちはだかる大男姿の松の大木
- ・ヒメボタル—— 頂上付近(標高 1000m以上)に生息。7/25 日前後に飛翔。
- ・トリカブト—— 冠着 13 仏付近に群生。 ・カタクリ—— 坊城平いこいの森の散策歩道の入口部分に群生。
- ・依代の杉(ヨリシロのスギ、頂上神社右前の杉の大木)—— 神が天上から地上に下りてくる時にいったんおとまりになる(依代)杉。
- ・天狗のブナ—— 頂上北側のブナの大木。霊験を身に着けた天狗の化身で、触るとその験力が乗り移る。

(3)冠着山の形成(信州大学名誉教授塚原弘昭)



冠着山の山頂を造る溶岩(安山岩)が冷却したのは、およそ550万年前だということはわかっている。火山活動が停止して500万年以上も経つと、雨量が多く地殻変動の激しい日本では、山は削られ、隆起・沈降もあり、山の形は大きく変化し、元の形はほとんど残っていないのが普通である。例えば、50万年前には今の善光寺平(長野盆地)はまだ影も形もなかった。

現在の冠着山は、火山の活動でできた高まりではなく、冠着火山の溶岩の一部と、その周りの、冠着火山が噴火する前からあった地層が、山の形に削り残されて山になっている。しがって、この山(冠着山)は火山とはいえない。

信仰の山(霊峰)——里人の心の拠り所、パワースポット

- ・注連張石(しめはりいし)信仰——頂上中央に鎮座する注連張石は、縄文時代中期、立石崇拝の象徴として崇拝されていた。山麓の円光房遺跡から方形配石遺構が発掘されており、その中に高さ40cmの立石が存在し、これは男性のシンボルとして見立てられ、それが冠着山頂上の注連張石と関係づけられ、子孫繁栄の信仰となっていた(戸倉史談会事務局長 大橋静雄説)。
- ・冠着社——古事記に由来する「月読尊」(つくよみのみこと)(夜を支配、天照大神の弟神)と大国主命(大己貴命(おおなむちのみこと))が祀られた。
この月読尊(月夜見尊)は変若水「(おちみず)の神格(雨を降らす力)を備えていた。
- ・祖霊神の御座す山——先祖の霊は神となって子孫の住む世界のすぐ近く(山や海)にいて、子孫を守ってくれてる。
仏教では33回忌が過ぎると、極楽に行った霊が「祖霊神」となるという説がある。
- ・阿弥陀如来に見立てられる——末法思想の広がりの中で、浄土信仰がつよまり、冠着山が阿弥陀如来に見立てられ、周辺に経塚や火葬墓など(菩薩に見立てられる)も配置されて信仰の中心となった。
上杉輝虎の願文(1564年、八幡神社にて)で八幡神社が阿弥陀如来の垂迹であることにふれている。
- ・修験道場としての冠着山——修験道の広がりの中で、冠着山一帯もその道場となって熊野の峰見権現が祀られ、木曾義仲が八幡神社に祈願文をささげた時、冠着山峰見権現となえている。(本地仏は大日如来) 鎌倉時代から戸隠山の前山(戸隠山に入山する前に詣でる)として位置付けられていた。明德寺と智識寺は山号を冠着山と号していた時代があり、戸隠神社を祭神として祀っていた事もあった。安養寺は今も別当寺として戸隠神社(それと関係の深い飯縄神社)を祭っている。
坊舎(修験道場であった証・地名)が各地にある——更級方面(坊城平)、筑摩群(坊の平)、上山田(堂平)
明治維新政府の「修験道廃止令」(1872年)により修験道が廃止させられたが(権現信仰の廃止)、平成27年、金峰山修験本宗の本山・吉野・金峯山寺の元宗務総長の田中利典氏を招いて修験道が復活した。
- ・石尊大権現(雨降山神(あふりやまの神))信仰——鎌倉時代に修験者が明德寺の不動明王と冠着社の大己貴命を神仏習合神として勧請し冠着山頂上に祀った(注連張石)。
- ・冠着権現——徳治年間(1306-7)僧侶専慶(弟子の真雅とも)は、薬師如来の小堂を作ったとき、薬師如来・冠着社「月讀命」・「諏訪社」を習合し明德寺に冠着権現様として奉祀した。この神は雨乞いの神として信仰され、石尊大権現信仰と合わせて修験者による雨乞いの行事が冠着山と明德寺で盛ん行われた。
- ・冠着権現社殿(冠着宮)が山頂に造営(1724年、1828年再建)
- ・神仏分離令(1868年)によって、冠着宮は明德寺を離れ(武水別神社の宮司が司祭となる)、羽尾村社「冠着社」(現代の冠着神社)となる。

・冠着神社(現在)(六社と歴代の神々が合祀)——地元住民の信仰の中心。

明治三十九年の勅令「一町村一神」により、冠着山に大字羽尾の五社が合祀され冠着神社となった。

そして地元の郷嶺山に祠を集め里宮とした。その後須坂村の須坂神社が合祀され六社となった。

その他、冠着神社には祖霊神など歴代の神仏が祀られている(諸説あり)。

例大際(7月28日)—— 毎年地元の氏子総代(区長)、祭典取締役と祭典を行い、五穀豊穡、地域安泰が祈願される。雨乞いの行事との位置づけもある。

六社—— 冠着社、瀧社、諏訪社、秋葉社、三島社、須坂社

・平成24年、冠着山の山腹・坊城平に冠着十三仏が復元され、春秋に祭典が挙行されている。

姨捨山の文学(平安時代～室町時代の和歌、物語、謡曲等)——「さらしな」はスーパーブランド地名

① 姨捨山を詠んだ和歌

・最初(源)——わが心なぐさめかねつさらしなや姨捨山に照る月を見てく古今和歌集(よみ人しらず)

この和歌の影響(さらしな文学の源)——この歌のインパクトが強烈であったため、「姨捨山」「さらしなの里」は、古代都人に月と棄老についての独特のイメージを形成させ、歌枕として(月の都)また棄老伝説(姨捨物語)の中心的地位とブランド性を獲得して。

・さらしなの里、姨捨山、更科の里・山・川、を詠んだ古代、中世の勅撰和歌集や私家集(多数)

御撰和歌集、後拾遺(ごしゅうい)和歌集、詞花和歌集、千載(ざい)和歌集、新古今和歌集、新勅撰和歌集、続御撰和歌集、他

・著名な歌人——藤原為真(ためざね)、西行法師、紀貫之、藤原基任、藤原俊成、源俊頼、宗良親王、鴨長明、後鳥羽院、右京太夫、大納言通光(みちてる)、小野小町、関白左大臣、他

・更級日記(菅原孝標の娘)の和歌——「月もいてでて、やみに暮れたるをばすてに、なにとてこよひたづねきつらむ」。年老いた自分を「おぼすて」になぞらえた。

② 大和物語(956年)——和歌「わが心慰めかねつさらしなや、、、」を素材とした物語、姨捨伝説についての初見。姨捨伝説、親孝行者と老人の知恵の里の源流(源典)となる。

③ 今昔物語(説話集)——平安時代から鎌倉時代にかけての説話文学を代表する、最大・最高の説話集。その30巻第9話「其の山をば姨母捨山と云ける。(中略)其の前には冠山とぞ云ける。冠の巾子に似たりける。(冠着山の名称説の一つとなる)

④ 謡曲「姨捨」(室町時代初期)——世阿弥の作「さてもわれ姨捨山に来てみれば、、、」大和物語が題材となってつくられた。姨捨山の他、更科の月・更科の里も登場

⑤ 曲舞(くまい)「更科」——南北朝時代・縁起のような叙事的な詞章を歌い舞う芸能

⑥ 「古今栄雅抄」の記事——「古今和歌集」の注釈書・姨捨詠「わがこころ」の解釈が載っている。

⑦ 京都御所の襖絵——清涼殿の襖絵(さらしなの里、姨捨山と千曲川、和歌が描かれている)和歌「おぼすてのやまぞしぐれる風見えてそよさらしなの里のたかむら」

⑧ 狂言本「木賊」(とくさ)1578年——信濃の名所を紹介、さらしなの里、姨捨山、「田毎の月」が記載。

冠着山・姨捨山の名称の変遷

① さらしな山(佐良志奈山・更級山)(奈良～江戸) ② おぼすて山(姨捨山) (奈良～平安)※1

③ 冠山(こうぶりやま、かぶりやま) 冠嶽 ※2(平安～鎌倉) ④ 帽著山(坊城・ぼうじょ山) (戦国)

⑤ 冠着山(冠木山)(かむりきやま) ※3(江戸・寛文) ※3 ⑥ 冠木岳(冠力岳)(かぶりきだけ)(江戸・宝暦) ⑦ 冠着山 (姨捨山)(明治以降現在)

※1、平安時代延喜五年(905)「古今和歌集」「我が心慰めかねつさらしなや姨捨山に照る月を見て」に、姨捨山が初めて登場。説話集「大和物語」(956)、「今昔物語」(1106)にも記述。

※2、「今昔物語」(1106)・・・その前に冠山(こうぶりやま)とぞ言いける。

※3、寛文六年(1666年)仙石区有林の「寛文水張」に「冠着山」(かむりきやま)の称が初めて登場。

・古事記にまつわる伝説——手力男尊が天の岩戸を背負って天翔(あまがけ)てこの山で休み、冠を着け直したことから冠着山と言われた。その時、岩戸の一部がこぼれ落ちて兎抱岩となった。

土地争いと入会権闘争

- ・この山一帯は松代藩の支配下にあった。しかし、地域住民には入会権が認められており、生活に欠かすことのできない重要な山であった。1704年藩有林の山見役が設置された。
- ・羽尾村と坂井村の境界争い解決(1697年)(頂上に上山田村を含む3村の境界が存在)
- ・頂上の注連張石を巡り羽尾村と山田村で争いが起こる。明徳寺の住職の仲介で解決(羽尾の勝)。
- ・冠着山権現社殿の屋根の葺き替えを巡って羽尾と仙石で争論、松代藩へ出訴。1861年仙石が葺き替える。
- ・冠着山が羽尾、若宮、須坂、上徳間、内川、千本柳の六か村に村有林として下付され、共同経営となる(1883年)。
- ・1884年、冠着山入会山論争が再燃し、遂に羽尾村を相手に他の五か村が長野裁判所上田支庁に告訴する。一審判決は羽尾村一村のものとなる。原告控訴その判決は原告勝訴。羽尾村大審院に上告、上告不受理。しかし、紛争は一層深刻化し暴動化寸前の折、戸倉村の坂井量之助県会議員が和解にのりだし調停成立(6年ぶりに事件解決)。図面六葉を作成し、六村関係者が調印する。

姨捨山(おばすて山)呼称の由来(諸説)

(1)渡来人系の先住民族によるものと(2)大和朝廷の時代になってからのものに大別される。

但、ここで紹介する幾つかの説や分類については異論や異説があるが、ありのままを紹介することにした。また、姨捨・姥棄は、インドから伝わってきた棄老伝説に影響されたあて字であって、実際に姨捨山に姨捨(棄老)の風習があったわけではない。

(2)先住民族説

- ・古代バビロニア人が日本列島に移住したという説がある。このバビロニア語に、「サラ」信仰、「シナ」月、「オバ・ウバ」峰、「ステ」南という言葉と意味がある。「サラシナ・オバステ」は「月の国の南の峰」の意味となる。
- ・原始時代この地域にアイヌ人が住んでいた。このアイヌ語(ヲボステ=大きな岩の里)に因んで呼称された。
- ・麻(オ)の葉(ハ)の捨(ステ)て場説——以前更級群麻績村は麻の産地であった。この地はその昔、朝鮮半島からの帰化人で麻を作る職人が多く住んでいた。そのころ麻を「オ」と呼んでいた。この麻績村の北東に更科山がそびえていて、その地域が麻の葉の捨て場となっていたからとの説。

(3)大和朝廷の時代以後の説

- ・紀元400年代、姨捨山の裾野に広がる一帯は、小長谷部(おはつせべ)氏の領地であった。小長谷部氏は皇族で科野の国造になった家柄で、かなりの実力者でありその一族(部の民)も多く住んでいた(現在の八幡・稲荷山・桑原・塩崎・石川などの地は、当時小谷荘と呼んでいた(紀元933年の「和名抄」に記載)。塩崎には長谷寺(当時は長聖権現と呼んでいた)も存在している。小長谷(おはつせ)はやがて「オハセ」から「オバステ」に転化していった。
- ・死者を葬った墓は「はつせ」(初瀬・古語)と言われ、江戸時代の学者(橘守部)はこれを「をはつせ」と言っていた。その昔この辺一帯にも墓地が存在し、「はつせ」が転じて「おばすて」になった。(あり得ないとの異説有)
- ・土地がずれて崖になっている地形を昔は、「ウバ(奪う)ステ(捨てる)」と呼んでいた。それが変化して「おばすて」になった。(楠原佑介ほか「地名用語語源辞典」)

参考文献: 姨捨棚田の文化的景観歴史的調査報告書(発行千曲市)・続姨捨山の文学(矢羽勝幸著)・戸倉町誌、地名遺産「さらしな」(大谷善邦著)、千曲市版レッドレーターブック、姨捨山新考(西沢茂二郎著)、戸倉史談会誌、他